世田谷村日記

石山修武

十月十四日

昨日は一日休養。好きな本を拾い読みして過ごした。夜原口夫妻来世田谷。打ち合わせ。十時四五分にはＮＨＫＴＶ取材で三井霞ヶ関ビル前に行かなくてはならない。コンバージョンプロジェクトの取材である。途上のプロジェクトをＴＶに流すのは少しばかり気がひけるが、ディレクターに押し切られた。しかしながら大きなスケールのコンバージョンを試みるチャンスだけは増やしておきたい。建築の保存は私にとっては修理修繕。再生も治療という事になる。幸い三十五年前に自分で設計したアパートの再生をやるようになりそうなので、幾つかの方法が手許に手繰り寄せられ始めた。

#5朝山邸は一番小さなモノだが、新築なのに保存的手法をとろうとしているところが面白い。一人のお母さんの意欲の中に芽生えた懐旧の想い。それはすでに通俗なノスタルジィの域を超えたノスタルジィの中のノスタルジィ。私の母が亡くなった父親の書斎から離れようとしないのもノスタルジィなら朝山さんという普通というには苦労の多かったろう五十二才の女性が自分が母親に育てられた民家のたたずまいらしきを復元してくれと言うのもノスタルジィ。誰の意志の中にも実は深く懐旧の構造的意欲はひそんでいる。昔、これもすでに亡くなった元松崎町町長依田敬一が言っていた二一世紀はどうやら古さに向かってゆくに違いないと言う確信のようなもの。ヨルク・グライターの日本には廃墟が無いから深いメランコリーが生まれ得なかったと言う指摘。その他諸々の事を考えるならば、日本人の、例えば少し例えは古いが横光利一の郷愁、堀辰雄の哀愁、北原白秋の憂鬱、等々我々が今忘れかかっている平板ではあるが、独特な感性の中に、あるいは抒情の中に大きな仕組みを見てゆく事は、それ程に捨てたモノではない様な気がするのだが、まだまだ我ながら甘いなァ。長田弘の抒情の変革という本はどんな本だったかも忘れてしまった。ノスタルジィどころじゃない記憶力は確実に減退し始めている。歴史的なモノ忘れの早い典型的な日本人になりそうだぜこのママでは。

十時半霞ヶ関ビル前取材その後新宿明治通りで取材十二時過には終了した。今新宿西口地下のコーヒーショップで一息ついている。五反田のデザインセンターに行くか、原稿書くかどうしようか。

十三時過デザインセンター、ジャン・プルーヴェ＆イームズ展。小じんまりしてはいるが、ジャン・プルーヴェの家具に座れて触れられた。プルーヴェの家具に特徴的な骨太のフレームは中空だったのだな。薄板を曲げて作っていたのだ。イームズの家具と比べてやっぱりプルーヴェのものは建築架構の要素を色濃くもっている。構造が原理的なのだ。イームズのモノはより生産物としての総合的なシステムに考慮の比重が傾いていたように感じた。アメリカとヨーロッパの違いだろう。

十五時半まで滞在する。会場には二〇代と覚しき人々が沢山訪れていた。ＯＺＯＮＥの椅子の展覧会が五百円、こちらが七百円と決して安くはないのにこの盛況である。これはどうした事なのか。そちらの方が気になるね。フリーター予備軍だな彼等の大半は。この人達の使い径はきっとある。

十七時新宿西口でコーヒーとホットケーキ。よく喫茶店に寄る

日だよ。一日に何回も喫茶店なんかに潜り込むのは全く久し振りだ。

プルーヴェの家具をつぶさに見て、この水準のモノを作るにはある程度精密なモノを作る事が可能な町工場と直結している必要を一層感じた。増井君の川口のラインかな。それとも宮本さんの五反田製作所か。世田谷では小さなモノの原寸のモックアップしか出来ぬだろうし、ここは思案橋ブルースだね。目ざわりデザインはまだターゲットさえ定まらない。山本夏彦翁の健康は回復したんだろうか。我ながら思考に粘りがない。困った。腹が減ってクラクラしてる。十八時西口で朝山さん安藤と待ち合わせ。永田町クロサワで会食。娘さんからの手紙いただく。

十月十五日

十時前大学中国の件打ち合わせ。コンペにかかる人数は三名に増やした。今日から本格的にとりかかろうと思うやさきに〆が延びたの報が入る。中国の事は大様に構えていないとやってゆけぬ。夜趙海光植林両氏世田谷村に。住宅建築の石山研特集の慰労会。体調が万全ではなく程々にして切り上げる。植林君はその後市ヶ谷の大日本印刷で校了だそうで、マ良く頑張る人だ。